

氏名（国籍）	馬 婷婷（中国）
学位の種類	博士（文学）
学位の番号	乙30
学位授与年月日	2021年3月13日
学位授与の要件	学位規定第20条 2項該当 日本文学科（日本文学研究）
論文題目	森鷗外小説の読解 —〈近代小説〉をどう読むか—
論文審査委員	（主査）梅光学院大学 特任教授 中野 新治 （副査）梅光学院大学 特任教授 岡田 喜久男 （副査）活水女子大学 名誉教授 奥野 政元

【論文要旨】

本論文は森鷗外の小説を研究対象として、〈近代小説〉とは何か、という近代小説を成り立たせる根拠を確認し、さらに〈近代小説を読む〉とはいかなることか、どう読むべきかという「読むこと」の原理と方法を確認するものである。その結果として、鷗外文学の先駆性、本質と価値を見直し、鷗外小説の生命力の甦ることを期待するのである。

ゆえに、研究方法としては、伝統的な先行文献の整理や実証的な考察にとどまることなく、伝統的な作品論や作家論の束縛を超え、文学理論に基づいて作品を読むことを基盤とした。当然のことながら、日本学界の視点だけでなく、欧米や中国の文学批評の理論や方法も視野に入れて論述を進めた。

以下、序章及び第一章から第七章までの概要を提示する。

序章では、まず文学理論と文学研究との関係を確認した。文学理論は方法論の問題だけでなく、文学の本質と文学研究の本質に関わりながら、私たちの認識問題にも関係するからである。その批判的、質疑的な精神は文学研究に大きな力をおよぼすことを確認した。

また、田中実の〈第三項理論〉を援用して、読書の意義を確認した。そして、中国の叙事学研究者の申丹が提出した「隠された叙述の進行過程」を紹介するなど、日本学界以外の視点も取り入れた。

第一章「『舞姫』論—語れぬことを読もう」では、手記を書く行為、母の死と

自我構造の問題を中心に、作品を読解した。豊太郎は手記を書くことによって、今まで捉えていた自己認識が虚偽であったことを発見する。彼は過去の自分を一旦切断して、その外側に立って、今という時点から折り返してみても過去のことを捉えるようになった。手記を書くという行為は豊太郎にとって、「無自覚な自己」という「第三項」との闘いであり、それによって、今までの自分を解体して、その上で新たな自分の構築を遂げようとする。母の諫死という事実を受け止めることができない、弱き心の豊太郎は、それをしばらく自分のなかに放置していた。しかし、母の死は彼の意識を超え、彼の識閥下に働いていた。豊太郎はそれを意識できず、手記を書いた時点でも意識しえなかった。しかし、過去はただ終わった時間ではなく、現在における認識でもある。過去の自己は客体そのものとしては、捉えようとしても、捉えられないが、過去の自己の像（影）は現在の自己の認識に反映される。それを捉え直すことによって、過去は動ごくようになり、それが現在の自己に大きく作用する。手記の書き手、つまり認識の主体は揺るがされ、新たな主体構築に向けて動きはじめるのである。『舞姫』は書くことによる無意識な「自己」の発見として読むことができる。

第二章「『半日』論—混沌の中の人、家と国」では、作家、作者と語り手を分別した上で、語りの存在と機能に注目しながら論じた。語り手に目を向ければ、物語の表層プロットに見えないものが浮上してくるのである。この小説には申丹が言う“隠性進程”（「隠された叙述の進行過程」）がある。表面の叙述は姑と嫁の対立のドラマで、奥さんという「新しい女性」への厳しい批判だが、その語りの背後には、語り手の母や博士にも向けた批判が隠されている。このような隠蔽された語りを読むことによって、作品に潜んだアイロニーの力が発見される。それは登場人物にだけでなく、「孝」を提唱した家長制度を中心とする天皇制そのものにも向けられている。

学問による立身出世を提唱した時代に、学問に秀でた博士が自分の家さえ治めることができないことは本人にとっても、明治時代のこの国にとっても、最大なアイロニーと言うしかない。高山家の危機は近代天皇制の危機の予告であるように見える。新旧の衝突の中で、いかに平和でおられるかは高山家の問題だけでなく、近代天皇制下の日本の問題でもある。

第三章「『蛇』の構造—時間・空間・語り」では、時間、空間と語りの構造から作品を捉えようとした。時間構造の部分で、作品本来の物語構造を一旦離れ、時計の打つ時刻に従って読んでみた。それによって、語り手「己」の役割が穂積家の傍観者から蛇退治の主役と転換されることが浮かび上がった。このような読み方によって、語り手の構造が二重化された。空間の構造では、「和気日融々」と書いた襖の役割に注目した。その開閉を穂積家の明暗の象徴だと捉えると、二回の開かれたことは、その家の二代の家庭像を見せてくれたことになる。同時に、語り手の「己」は穂積家の物語の聞き手となり、語り手と聞き手の二重の役割をはたすことが明らかになる。さらにこの家を大きな時空間——歴史の時空の中に置いてみれば、〈家と国〉という構図が見えてきた。そこに潜んだ日本の近代化中の問題も浮かんで来る。語りの構造では、語り手が登場人物によって違う語り方策をとったことを論じた。それによって、千足と清吉が対照的に描かれていることがわかった。

第四章「『かのやうに』論—虚構と真実に関する哲学」では、人物関係を論じた上で、田中実の「第三項論」と関連させながら、作品に潜んだ可能性、特に哲学的な思想を取り上げた。『かのやうに』は世界観認識に関わる一作であり、その豊富な哲学的思想は現代においても、いろいろな思考に読者を導く。この作品は当時の社会問題と時代危機の反映だけでなく、鷗外の文学創作、特にのちの歴史小説の創作について、また、読みという行為について、さらには世界をどう認識するかについて関わるのである。従来の研究のように秀麿と父の「神話」と「歴史」に関する対立を論じるのと違って、本論では「かのやうに」の哲学と「第三項論」とに通底したものを発見した。両者は「本当」に関する認識で一致しているし、「世界認識のための虚構装置」と見なせることでも一致している。

また、本論の最後で、魯迅の『呐喊』の序文と比較して、両者の比較研究の可能性を問題提起とした。さらに、「ものを書く」人として、秀麿も鷗外も虚構の形式によって非虚構（真実）の主題を書くという問題に直面していることや、結局、鷗外は現実から一旦離れ、過去＝歴史という「現実の外部」に目を向け、歴史小説を書くことに転じたという歴史小説創作への道程を確認した。

第五章「『阿部一族』論—偶然・必然・自然」では、鷗外の所謂「歴史其儘」

とは、そこから映し出された人間の「自然」そのままであるという基本認識の上で、登場人物の心理描写を中心に考察した。作品に登場する一連の人物はその人間としての真実が極めて自然に書かれている。そこでは、殉死より死そのものの問題が表現されている。近代の死が生を否定し、生の反対であるのに対して、『阿部一族』の人々の死は生を超えたものである。長十郎のような殉死者は、死によって主君に対する感恩と忠誠の心を表した。五助は死によって、感恩と忠誠のほか、身分を超えた命の平等を証明した。弥一右衛門は死によって武士としての命を惜しまぬ証拠を提示した。阿部一族の全滅は、死によって武士としての尊厳を守り、侮辱への反抗と家族の団結を提示した。死は彼らにとって、何らかの証明のようなものであった。彼らは死ぬが、その延長線のうえで、もっと多くの人の生が続けられるのだ。であれば、死は生の価値をなくしたのではなく、新しい生を孕んだものである。「生に向けて死ぬ」「生きるための死に方」なのである。

第六章「『高瀬舟』の語り―他者理解と自己認識」では作品の構造と語りの構造を分析して、登場人物庄兵衛と喜助における他者理解と自己認識を見た。語り手によるフランス語「オオトリテエ」という言葉に注目することで、語り手の姿が露呈され、語り手は現代に立って、時代が異なる過去の物語を語っていることがわかった。その語り手の存在を意識し、語り手の声をよく聞けば、作品は知足と安楽死という安定的だが発見のない物語から、〈他者〉による自己認識の動的な過程へと、さらには過去と決別し未来へ向かう超越的な存在を見せる世界となった。従来の読みの示す「知足」や「安楽死」の問題は庄兵衛の他者喜助に対する理解に過ぎない。それは喜助の問題ではなく、庄兵衛の認識範囲内の問題である。喜助は弟の死によって、自己意識を獲得し、さらに遠島という刑罰で初めて財産と居場所を手に入れた。それは近代人になる可能性も秘められているのである。

読書は他者理解と自己認識の過程そのものである。作品が「到達不可能な他者」であると知りながら、それにアプローチして行く。そのなかで、作品が豊かになるし、自分も豊かになっていくことこそ読書の意味である。さらに言えば、我々が世界を認識することもそういう過程である。この意味において、『高瀬舟』は教材として、文学教育に相応しい作品である。

第七章「歴史小説の方法—『寒山拾得』を論じながら」では、『寒山拾得』を論じながら、鷗外の歴史小説の創作方法と読み方を探ろうとした。「歴史」は現在超越の存在であり、そこにパラレルワールドの可能性を秘めているという新しい見方を提示した。

文学作品を読むことは、作者の謎を解くことでもなく、物語の経緯を分析し、ストーリーの空所を補うことでもない。読みを通して、自己を発見し、また発見された自己を新たに認識し、更新していくことである。この繰り返しにより、読者は新しい自己を発見するとともに、既存の世界認識も更新でき、新しい世界を構築することも期待できる。こうして、文学作品は本当に読者に作用できる有力なものとなり、現実と関連づけることができ、紙面の上の活字ではなく、真の力のあるものになれるのである。

口頭試問報告書

日 時：2021年2月18(木)14:00～15:50

場 所：CROSSLIGHT VII(会議室)

参加者：奥野政元(外部審査者 活水女子大学名誉教授)

岡田喜久男(副査)、中野新治(主査)

論 文：馬婷婷「森鷗外小説の読解—<近代小説>をどう読むか」(博士論文)

様々な要因により、奥野は長崎から参加し、中野、岡田は学内、馬は青島の自宅でリモートを使って試問を行った。

本論の内要は論文要旨にまとめられてあるが、序章、第一章『舞姫』論—語れぬことを読もう—、第二章『半日』論—混沌の中の人、家と国—、第三章『蛇』の構造—時間・空間・語り—、第四章『かのやうに』論—虚構と真実に関する哲学—、第五章『阿部一族』論—偶然・必然・自然—、第六章『高瀬舟』の語り—他者理解と自己認識—、第七章歴史小説の方法—『寒山拾得』を論じながら—の八章より成る論文である。

本論の特色は、中国の大学で日本文学を講じている著者が、所謂研究論文を超えて、「読むという行為」そのものの本質を問い、「読むこと」が読み手の中にどのような新しい状況を生み出すか、という点に極めて意識的であることである。「読むこと」は単なる自己慰安や同感や確認や、作品を自由に意味づけることではなく、それによって自己が打ち倒され、新しい自己、新しい世界が誕生する時空を導くものでなければならない。教育者でもある著者は特に、日本の著名な研究者田中実の理論に拠りながら、これまでの作家論や作品論、流行したテキスト論とも異なる「新しい読み」の理論の確認と、その実践の場としての7つの作品読解を行って、「読むこと」が、どのような新しい地平を切り拓くかを示そうとした。勿論、これは試みとしては大変貴重なものであるが、田中実の理論が難解さを指摘されることが多いように、実際には、相当な困難を伴う作業である。

著者は作品を論じるごとに、先行研究を確認し、その当否を分析した上で周到に論を始めているが、必ずしも、すべての各論でそれに代わる「新しい読み」が鮮やかに提出されている訳ではない。ゆえに、試問は、序章の総論よりも、各論に当たる第二章から第七章までを中心に行われた。

岡田からは日本語表現、特に助詞の使用の誤りについての指摘や、用語の概念の説明の不足が指摘された。

奥野からは、著者が「近代小説」と「物語」を明確に分け、「近代小説」は本質的に単なる物語(ストーリー)の記述ではなく、語り手の自己表出性こそがストーリーを生み出していることが強調されているにもかかわらず、物語という言葉の使用が散見されることの矛盾が指摘された。これは大切な指摘であり、著者が序章で熱く述べている総論が、各論ではまだ未消化な部分を残していることが明らかになった。中野は、同様の視点から、著者の使用する「主体客体を越えた第三項」、「到達不能の他者」「隠された叙述の進行過程」などの概念が、取り上げられた作品にどう表れているのか、又、読み手はどのようにしてそれを発見するのかについて、具体的に答えを求めた。やりとりは一時間以上に及んだ。「舞姫」論、「阿部一族」論、「高瀬舟」論には、相当に新見も見られるし、論理もよく展開されているが、その他の作品分析については物足りない部分も残る。また、取り上げられた作品の数も、もう少し多い方が望ましい。以上のような問題点はあるが、本論は従前の作家論や作品論を越え、又、テキスト論の陥り易い、恣意的で、アナーキーな読みを克服すべく、「新しい読み」への模索を行ったものとして評価されるべきものであり、今後の一層の研鑽を期待して、博士論文として承認するものである。(文中敬称略)

文責 中野新治